

三原市の「地産」

三原市の「地産」はどのようなものがあるのでしょうか。三原市は海、平地、山と非常に自然に恵まれています。その為、農作物はもろろんのこと、魚介類、畜産物も採取・生産することができます。

また、採取される農産物は、合併前と後では、大きく様変わりをしています。広島農林水産統計年報(図1)によると、合併後は、豚・鶏卵等の畜産物が上位を占めています。

このことから、三原市は、幅広い食材を、市民に提供できる特長を持っていることがわかります。

農業産出額

(単位: 百万円(平成11年以前), 千万円(平成12年以降) %)

年次	農産物産出額	位1		位2		位3		位4		位5		位6
		産物	構成比	産物	構成比	産物	構成比	産物	構成比	産物	構成比	
平成11年	2,331	米	826	35.4	わけぎ	358	15.3	みかん	156	6.6	アロイ	X
平成12年	261	米	84	32.2	わけぎ	43	16.5	みかん	36	13.8	アロイ	X
平成13年	240	米	80	33.3	わけぎ	47	19.6	アロイ	X	みかん	15	6.3
平成14年	229	米	76	33.2	わけぎ	30	13.1	みかん	25	10.9	アロイ	X
平成15年	231	米	88	38.1	わけぎ	29	12.6	みかん	21	9.1	アロイ	X
平成16年	239	米	68	28.5	みかん	34	14.2	わけぎ	27	11.3	アロイ	X
旧三原市	254	米	103	40.6	豚	X	X	鶏卵	17	6.7	アロイ	X
旧大和町	49	米	38	77.6	鶏卵	X	X	だいにん	1	2.0	なす	1
旧本郷町	268	米	71	26.5	鶏卵	X	X	ひな	X	X	アロイ	X
旧久井町	849	米	299	35.2	豚	83	9.8	鶏卵	64	7.5	アロイ	56
平成17年	833	米	284	34.1	豚	104	12.5	鶏卵	58	7.0	アロイ	45
平成18年	833	米	284	34.1	豚	104	12.5	鶏卵	58	7.0	アロイ	45

中国四国農政局広島農政事務所「広島農林水産統計年報」

三原市で「地産地消」を実現するためには

「地産地消」を協働で行ってゆくためには、まず行政と農林水産に関わる業者の方々が話し合いをする必要があります。これまで、それぞれでは「地産地消」について検討されていますが、他の業種も含めて話し合いをすることで新しい発見があると考えられます。また、その場をまとめるために行政は欠かせません。さらに、購入者でもある市民の声をしっかり取り入れることで、協働による「地産地消」が実現できると考えます。

6次産業を実現し、協働のまちづくりに繋げてゆく!

6次産業は、コンセプトやスローガンとしては、非常に分かりやすいのですが、実践してゆくためには、様々な課題があります。多くの先進地事例を参考にし、三原市にあった独自の方法を検討してゆく必要があります。本年度地域の力確立委員会は、協働のまちづくり実現に向けて、三原独自の地産地消を確立するための活動を検討し実践して参ります。

次世代を担う子どもたちには…

人が繋がる三原を子どもたちのために

豊かさや引き換えに忘れ去られたもの

昨今、物質的な豊かさからか、人とひととの繋がりが希薄になり、地域のコミュニティが従来通り機能していない話をよく耳にします。隣に住んでいる人もわからない。通学している子どもがどこの子かわからない。散歩しているお年寄りがどこに住んでいるかわからない。そのような三原で本当にいいのでしょうか。

希薄になった人間社会では、様々な問題点が浮かび上がってきます。たとえば少子高齢化に対する福祉面での対応や、次世代を担う子どもたちの健全育成など、地域が一体となって取り組まなければならない課題が、人間関係が希薄であることから、解決できにくい状態になってしまいます。

今、郷土愛を育む環境が必要!

現在の社会問題の要因は、人の意識がもたらしています。問題に対し、自ら積極的に解決するのではなく、誰かが何とかするだろうと他人任せにし、解決を先延ばしにしているように感じます。そのような状態では、問題が解決しただけではなく、これからの世代にとっても悪影響を与えかねません。

私たちの祖先は様々な問題に対して、人とひととが繋がることで一致団結して問題を解決してきました。みんなで力を合わせて問題を解決する姿を子どもたちが見ながら育ててきたのです。そのような環境で育ったならば、子どもたちも大人になった時に、力を合わせて問題を解決できる大人になるのではないのでしょうか。

三原がよりよいまちになってゆくためには、地域での人間関係の醸成が大切な要素になってくると考えます。地域の中で、人とひととが繋がりあい、交流する環境の中でこそ、子どもたちは人間関係の重要性を理解し、お互い助け合うことの大切さを感じ取り、立派な大人へと成長してゆけると考えます。そういった環境が郷土愛を育むのではないのでしょうか。



(社)三原青年会議所 2月例会開催

地域の特産を活かして輝いているまち、世羅町の秘密とは?

～地産地消を通じたまちづくり事例の紹介～



地域の力確立委員会(阪井委員長)は、2月例会において「地産地消を通じたまちづくり」と題して、後 由美子(世羅町役場6次産業推進協議会コーディネーター)講師をお招きし、地産地消と6次産業によるまちづくりの成功事例について学びました。



世羅町の農業は、高齢化・担い手不足などで儲からないなどの問題を抱えていました。県の農業振興策「ふるさと一品運動」で産直市がたくさん出来ましたが、地元の人達にまかせてもなかなかうまくいきませんでした。



そこで、平成11年に3町(世羅・世羅西・甲山)の観光農園・果樹農園・産直市場・農産物加工グループなど32団体が連携して「6次産業ネットワーク」を設立し、特産品の開発や、消費者との交流・地産地消の推進を行うことによって、大きな成果を生むことが出来ました。また、人と人の交流が活発になり様々な分野との連携が取れたことで、地域への強い愛着が沸き、まちづくり意識も高まることとなりました。

そして、現在は世羅台地全体を農村公園化するという大きな目標に向かい町民、企業、行政が一体となり新しいチャレンジに取り組んでおられるそうです。

今回の例会では各々が連携することの大切さや、地産地消の推進が更なるまちづくりへと繋がるということを伝えました。当委員会では三原市もひとと、地域同士の繋がりが強くなることで協働のまちづくりへと繋がっていくと思います。

地域の力確立委員会では、この成功事例を参考にし、今後は三原市における「地産地消を通じたまちづくり」を提案してゆきたいと考えています。

6次産業ネットワークとは?

世羅高原の問題点

- 農業で経営安定ができない
- 観光農業はグレード間に欠ける
- リピーターが少ない
- 要りこみ客の減少
- 加工グループは商品の売り場がない
- 直売所では商品が不足

6次産業化

1次産業
新鮮・安全・多彩

連携

2次3次産業
創る・見る・食べる
触れる・売る・泊まる

地域の魅力を発信していることで住民一人ひとりが、まちづくりに参加している意識を持ちながら楽しく充実感のある活動が出来ています。

また、各地域との交流や連携とすることで、郷土愛や一体感を育むことにも繋がってきています。

ネットワークのメリット

- ・大型イベントが出来る
- ・高度な研修ができる
- ・お客様の満足度が上がる
- ・お客さまの共有ができる
- ・マスコミに取り上げられやすい
- ・ブランド化しやすい
- ・お互いに情報交換ができる
- ・世羅高原のイメージ強化
- ・行政の支援が受けやすい

販売・所得拡大・就業機会

チキヤン	中央	地所	松益	建設
新中	中央	地所	松益	建設
中川	川	川	川	川
中川	川	川	川	川
中川	川	川	川	川
中川	川	川	川	川
中川	川	川	川	川
中川	川	川	川	川
中川	川	川	川	川
中川	川	川	川	川

本紙がつかう「は、」は、ここに掲載の企業のご協力と(社)三原青年会議所の自主財源で発行しています。

